

## 大学教育と大学図書館

### - 大学改革は図書館から -

土持ゲーリー法<sup>\*</sup>

#### 大学図書館の原点

戦後日本の大学は1948年から始まりましたが、国立大学の場合は、1949年からでした。そこでは、制度的な改革にとどまらず、カリキュラム内容も含めた世紀の一大改革でした。その後、社会が変化し、人々も変わったにもかかわらず、大学は旧態依然のままで、未だ「象牙の塔」的な意識から脱皮できず、社会から「隔離」されています。

戦後の新制大学には、どのようなことが期待されたのでしょうか。そこでは、新たに「一般教育」および「単位制」が導入されたことからわかるように、高校と大学の連携を視野に入れた民主的な高等教育機関として、誰でも、どこでも学ぶことができるという生涯学習の萌芽が見られました。

大学図書館の原点はどこにあったのでしょうか。それは、戦後日本の教育改革の原点となった1946年のアメリカ教育使節団の来日まで遡ります。27名で構成された著名な教育使節団は、幼稚園から大学に至る教育改革の青写真を『報告書』のなかで勧告しました。これが、戦後教育改革の「バイブル」と称され、教育改革の原点となったことは良く知られています。

同使節団は、大学図書館についても重要な勧告をしています。たとえば、『報告書』の第6章の「高等教育」では、「あらゆる水準の高等教育において、研究および個々の学生の進歩にとって必要不可欠な存在であるものは図書館である」と述べています。すなわち、学生の進歩にとって、図書館は不可欠な存在であると位置づけています。この『報告書』を受けて、1948年2月に、「米国図書館顧問団報告書 国立国会図書館の設立に関する助言」が提出され、現在の国会図書館が誕生したという経緯があります。

#### 大学図書館は誰のためのものか

教育使節団が勧告しているように、大学図書館は「個々の学生の進歩」に十分に寄与しているといえるだろうか。日本の大学教育に関する権威者の一人である寺崎昌男氏(東京大学名誉教授)は、『大学教育の創造 歴史・システム・カリキュラム』(東信堂、1999年)のなかで、大学図書館について、図書館がゼミを運営するために必要不可欠であると述べています。ゼミの共同研究成果をクラスで発表したり、討論したりする場合、図書館での調査活動は不可欠です。国の教育政策の「課題探求能力の育成」は、図書館での調査活動を前提としています。そのような設備を整えてやるのが大学の役割であり、そのような雰囲気の中で授業を進めるのが教員の務めなのです。公立はこだて未来大学の「プロジェクト学習」は注目に値するものです。ここでは、それぞれのテーマにもとづき、数名の学生がグループを組んで、担当教員やアドバイザーと共に問題提起から問題解決までのプロセスを実際に行い、体験するというもので、まさしく、「課題探求能力の育成」を目指しているものといえます。このような「自学自修」を促進するには、図書館での調査活動は不可欠となります。

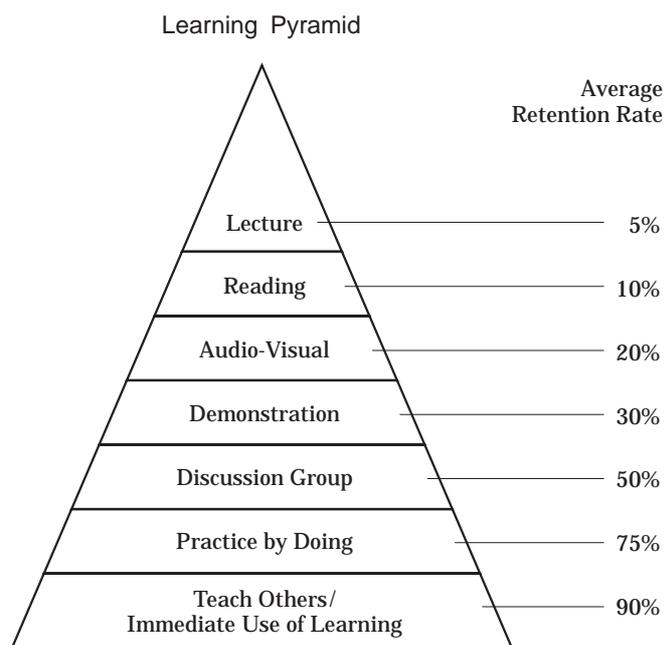
学生にとって図書館のイメージが、必ずしも、好意的でない理由の一つには、教員側にも責任があり

<sup>\*</sup> 弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室

Faculty Development Office, Center for 21<sup>st</sup> Century Education, Hirosaki University

ます。これまで、日本では、大学を「教育」の場として捉えるという発想が乏しかったように思われます。たとえば、寺崎氏は前掲の著書のなかで、「教授にとっては、図書館は自分の独創的な研究のための高価な貴重書を保存する場所ぐらいに思いがちで、図書館職員の痛烈な批判の言をかりれば、『自分の専攻に関係のある資料を集めて、防壁のように研究室のそこそこに積み上げ、自分の講義のタネ本は決して手離そうとはせず人目に触れることすら避けよう』としているのではなかろうか。…教授の関心が自分の周囲に積んで置く図書にのみ集中されている限り、学生の研究読書の指導が忘却されて顧みられないであろう。ところが、教授が自分の担当する学生に対して適切な読書に関する指導・助言をすることこそ、特に新制度における重要な基礎前提なのである」との論文を引用しています。これは、斉藤敏氏が新制大学への切り替えに直面して、「大学図書館における諸問題」『新制大学の諸問題』（大学基準協会、1957年）のなかで述べたものですが、このような状況は、多分、現在も生きているのではないのでしょうか。

人間の記憶力を高めるには、いろいろな方法が考えられますが、講義は、教員が考えるほど、学生の記憶にとどまるものではなく、試験が終われば、すぐに忘れられます。以下の図表のように、記憶力がどのように維持されるかを表した興味あるデータをミネソタ大学授業・学習サービスセンターのオブライアン副センター長（Jane O'Brien, Associate Director, Center for Teaching and Learning Services, University of Minnesota）から提供してもらいました。この図表からも、「講義」よりも「読書」の方が記憶力の維持率が高いことがわかります。何よりも顕著なことは、グループ討論そして「実践力」が重要であることが明らかです。



*Source: National Training Laboratories, Bethel, Maine*

### アメリカおよびカナダの大学図書館

アメリカおよびカナダの大学図書館が大学教育にとって重要な役割を果たしていることについては、『生涯学習教育研究センターホームページ』の第16回「授業改善への取り組み いま、日本の大学で何がもめられているか」に掲載しましたが、図書館は学生に利用されてはじめて意義があると考えています。そのような学生の視点に立った図書館改革がアメリカおよびカナダの大学では行われています。なかでも、注目したいのは図書館司書の役割です。図書館司書は、一般に、図書館学の修士号を獲得しているので、教壇に立って図書館に関する授業を教え、単位を与えることができます。そこでは、理論的な授業だけでなく、図書館利用の実践も合わせて行っています。

たとえば、カリフォルニア大学(サンディエゴ校)では、効果的な授業を行うために何ができるかという視点から、学士課程教育における図書館の設備を充実させ、図書館の資料を利用した効果的な論文作成方法に関する2単位の授業(“Contemporary Issues 50: Information & Academic Library”)を開講しています。この大学は州立であって、日本の国立大学に相当します。しかし、他のカリフォルニア大学に比べて、1960年に設立された新しい大学ということもあり、環境・設備がより充実しています。

図書館は、従来のように、蔵書の多寡を競う時代ではなくなっています。書籍が電子化されつつある現状ではあまり意味をもたなくなっているからです。“Publish or Perish”(論文業績の多寡)が叫ばれた時代は「前世紀の遺物」となり、研究業績も論文の数ではなく、引用される頻度によって評価されています。同じように、図書館に対する評価も学生の利用頻度によってはかられるべきだと思います。

同大学のCLICS(Center for Library & Instructional Computing Services)の図書館は、明るくて、広々した空間に机と椅子、そしてパソコンが配置されています。これらの椅子はすべてロッキングチェアで長時間リラックスできます。訪問したのは9月はじめの新学期前で、学生は誰もいませんでしたが、10月になると学生で溢れるそうです。学生の共同研究のための個室(5~6人用)もあります。これらの机や椅子、それにレファレンス用の参考文献のほとんどは寄贈されたもので、寄贈者の名前が銅板に刻まれています。図書館本館(Geisel Library)の建物はデザイン的にも優れ、館内は冷房が完備されています。

アメリカおよびカナダの大学の教員は、書籍を買って研究室に揃えるという習慣があまりないようです。そのため、日本のように、書物が売れないので研究者が刊行することは容易なことではありません。その分、図書館が充実しています。多くの場合、近くの公立図書館で借りて読むことができます。文献がない場合でも、図書館相互貸借(Interlibrary Loan)を利用することができます。

大学図書館はとくに充実しています。たとえば、コロンビア大学のケント・ライブラリーは、東アジア研究を中心とする図書館で、図書館の建物の中には講義室や研究室があります。日本文学で著名なDonald Keene教授の研究室も図書館の同じ建物の中にあり、授業も図書館にある講義室で行われます。

コロンビア大学に入学した約30年前、ある教授の研究室を訪ねたが、何度行っても不在なので不思議に思っていたら、図書館にいたことがわかりました。その教授は、図書館の書庫で資料を探していました。他の教授たちも、学生たちに混じってリーディングルームで書物を読んでいました。当時、私は、大学教授は優れた業績を有して研究など必要ないと思っていたので、強烈な印象を受けました。また、図書館司書が権限を持っていて、教員にも図書の利用法などを厳しく指導しているのを目のあたりにして驚きました。図書館司書が専門家として機能していると感じました。

指導教官であった中国人(帰化したアメリカ人)教授は、人間の記憶はたいしたことはないので、多くのことをいつまでも覚えておくことは難しい。それよりも、検索の方法を学ぶことの方が大切であると指導しました。新たな課題に直面し、情報を的確に収集する発見力が、生涯学習社会において大切であるとアドバイスしてくれました。

「21世紀教育テーマ科目」「研究・教育から見た世界と日本(D) アメリカから見た日本の教育と研究の現状」の授業(2005年度後期)では、「図書館探索クイズ」を課しています。たとえば、本年度は、名古屋大学総長の飯島宗一「大学における一般教育」の論文を附属図書館の中で探し出すというものです。学生はあらゆる手段を駆使して文献を探すことができます。私も、この文献を探すのに苦労しました。この論文が、附属図書館に所蔵されていることは事前に確認しました。驚いたことに、何人かの学生は、「いとも簡単」に文献を探したのです。優れた検索能力を有していると感心しました。もちろん、「先生、どうしても探せません!」と困っている学生もいました。そのような学生には、附属図書館に必ずあるので頑張って探すようにと励ましました。このように課題を与え、文献検索をさせる作業は、能動的学習能力や問題解決能力、発見力を高め、学ぶ楽しさに繋がると考えています。

最近、日本の学生の学ぶ意欲の低下が問題になっていますが、この点に関して、米IBMの教育事業

責任者は、『日本経済新聞』(2005年9月26日)のインタビューに答えて、「インターネットやテレビ、ビデオゲームなど様々なチャンネルから情報が入ってくる時代なのに、学校は何十年も前に適切だった教え方にとどまっている」と批判し、「学生たちの能力が下がっているのかといえば、決してそうではない。もっと彼らに響く教え方が必要だ」と教授法のあり方に疑問を呈しています。大学の全入時代の到来によって、多様な学生が入学してくる現状では、従来のように、教員の視点に立った画一的な授業法では通用しません。学生のニーズに応じた多様な教授法にもとづく能動的学習への配慮が強く求められます。

〔注：「弘前大学生涯学習教育研究センターホームページ」(第20号、2006年2月)より転載したのですが、写真は除いてあります。〕